

部屋の大きさは八畳だが、これは団地サイズの畳が普及する前に造られた建物であるから、さほどの狭さを感じない。加えて、家具が少なく、ベッドにかわるソファと小さなテーブル、本棚と電話機があるだけなのでドアを開いて入った瞬間は実際より広く感ずる。

ここで身長一メートル七十八センチ、体重六十八キロの人間がひとり暮らしている。滅多に外出することはない。最低限の食料品の買い出しをのぞけばすべき用事もないのだ。

部屋において、時間をすごす方法は限られている。テレビも新聞もない。本を読むか、ただすわり、あるいは寝そべって考えるだけである。

そうして数日間を一步も出ずにすごしたとする。部屋の内容に苦痛を強いるものはない。しかし空間そのものに飽きを感じる。

電話が鳴ったのは午後一時だった。

私はベッドの状態にしたソファに寝そべり、この空間の中で可能な行為に没頭していた。アメリカのコラムニストが書いたその本は、帯によると抱腹絶倒請けあいだということだった。

ページは全体の半ば過ぎまで進んでいる。私は、自分にはユーモアを解するセンスが乏しいのだ、さもなければこの帯を書いた人物がひねくれたユーモアの持ち主なのだ、と結論した。受話器を取ると、女の滑らかな声が「もしもし」といった。即座に間違い電話だと思った。し

かし、この方の結論は私の誤りだった。そもそも、電話に出るべきではなかったのだ。

「加瀬……さんのお宅ですか」

「そうですか」

名乗られるまで気づかなかった。

「三津子です」

気まずいと形容できるほど、濃密な何かを感じさせる沈黙ではなかった。あるにはあったが、古すぎて、香りも感触も失われた過去である。

「それで？」

「小切手受け取った？」

「ああ」

「どうして？」

「どうもしない。ここにある」

私は読みかけの本にはさんでいた封筒を取り上げた。中に入っているのは、額面十万円の小切手と、一通のメッセージである。

「五月十五日PM三時、Tホテルロビーにお出乞う筈見」

五月十五日は昨日だ。

「行かなかったのね」

「筈見というのは君の新しい恋人か」

「いいえ、ちがうわ」

「では新しい持ち主か」

三津子の声が鋭くなった。

「の、秘書よ」

「今頃、私に会ってどうする」

「会いたがっているのはわたしじゃないわ。あなたに頼みたい仕事があるからなのよ、損な仕事じゃないわ」

「小切手はまだ金に替えていない。送り返す先を教えてください」

「話だけ聞いて」

「駄目だ。いきなり小切手を送りつけるというやり方も好きじゃない。君の新しい持ち主となれば尚更だ」

「あの人はあなたにできる事を知っていて、頼もうとしているのよ」

「よせ」

「御免なさい。わたし、変わったのよ」

「悪い変化じゃない。思ったことをはっきりいつている」

「五年あった、から……」

「その話は聞きたくない」

「じゃあ会って」

「君にか」

「わたしに、それから今のわたしの持ち主に」

「……………」

「どこに住んでいるかはわかつてる。一時間したら迎えに行くわ」

私に断わる暇を与えぬよう素早く切った。

切れた受話器が音を発するまで持っていた。深呼吸して部屋を見回した。今の本を放棄すれば、私に残された行為は考えることだけだ。考えたくはなかった。

立ち上がって着替えた。

迎えにやってきた車はとてつもない代物だった。メルセデスのリムジンで、ウインドウには偏光シールが貼られ、中をのぞくことができない。もつとも、三津子の持ち主であるということとを考えれば領けなくもない。

彼女の恋人になる資格は、それなりの誠意と愛情を与えることができる男なら誰にでもある。まして三津子を知れば、ホモセクシュアリストでない限り、愛情を注ぐことがさほど困難でなくなるに違いない。

派手やかな華美さにはほど遠い、しかし一度見れば簡単に目をそらすのが難しくなる。

しつとりした瞳と笑みを含んだ口元を、自分だけのものにして、二人きりの場所で見つめたくなるものだ。

五年間の時間は、彼女に潤いと翳りを与え、外見から知る限り魅力を奪ってはいなかった。五年間あれば、男の女に対する価値観も変化する。彼女の変化は、私の価値観を裏切らなかつた。

襟の深い、ニットのワンピースを彼女は着けていた。茶の靴は、長身の彼女を必要以上高く見せぬよう、踵を短くしてある。他の女性がはけば、野暮ったく見える靴だろう。

彼女がそれをジョルダンに、彼女のためにデザインさせたと聞いても私は驚かない。

色が白いのには白系ロシアの血が混じっているからである。年齢は三十を幾つか越しているはずだが、唇と眼の動きが充分にその年齢をカバーできる。

実際、二十四、五に見える。肌の荒れもなく、厚いファンデーションの偽装とは無縁の存在である。

長い髪を無造作にかきあげると、車から降りたち、アパートの模造大理石の階段を降りる私を見ていた。あるいは私が出てきた建物を。

運転手は髪をひつつめた、女教師のような四十代後半の女性であった。濃紺のスーツは男物のように、曲線に乏しい彼女の体を被っていた。ベンツのドアに手をかけたまま、無表情に、

三津子の後ろ姿を見つめている。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。